

南原繁とヒルティ

2021.8.3 山口周三

1 はじめに

南原繁は、晩年、「学士会会報」などで、ヒルティの著作を読むことをしばしば勧めている。例えば、

・新年祝賀会挨拶（1966. 1.4 学士会新年挨拶）（南原繁著作集10：64－66）

「偉大な理想」

ヒルティは今世紀初年代まで生きたスイスの著名な法律学者・哲学者で、大学教授であり、また時に実際の法律・行政に参与した教養の高い人です。その書物は各国語に翻訳され、わが国でも全著作がほとんど訳出されています。内容は学生時代に理解されるよりもむしろ卒業後、いな壮年、老齢になって味読さるべきもので、私など座右に備え、この新年にも『幸福論』を読み返しました。

彼の所説を約言すれば、次の如くであります。およそ人生に幸福で、且つ最も健康な生活とは、純粋な心と偉大な理想と、そして常に有益な仕事を伴った単純な生活である。このほかに、どんな健康法も、これに匹敵する効力を持たない。たとえ、われわれの生活力が衰えるときでも、依然として保たれ、むしろ絶えず増し加わる内的・精神的な力がそこから生ずるのであり、それが人間の老年期をもほとんど気がつかぬうちに乗り越えさせ、やがて人は新しい生命の国に移されるであろう、と。……

また、1974年1月の学士会報には、次のような新年挨拶の文章を掲載している。（この文章は、南原繁著作集第10巻の別冊に印刷されているから、南原の生涯で、ほとんど最後に活字になった文章だと思う。）

・年頭の辞（昭和49年1月）（著作集第10巻補遺）

私ども若いとき旧制一高時代に、名物教授と謳われた岩元禎先生のドイツ語の教科書に、カール・ヒルティの『幸福論』を学んだことがあります。それはいまだに座右の書のひとつとなっております。ヒルティはスイスの優れた法律家且つ哲学思想家でありました。…

この幸福論の終わりに次の如き叙述があります。「(人は) 生命の息のある限りはつらつとした精神を持って働き続け、……最後に“仕事さなかに倒れること”これこそ、きちんとした老年の正しい経過であり、また一般に人生のこの上なく望ましい終局である。……

このように南原が勧めるヒルティという人は、どんな思想を持っていた人であろうか、南原繁とヒルティの関係について、特にヒルティと南原繁のキリスト教信仰に重点を置きながら、考察してみたいと思う。

1 ヒルティの生涯と主要著作

ヒルティ（1833. 2. 28－1909. 10. 12、76歳で死去）は、スイス東北部ヴェルデンベルグで生まれ、クールで育った。南原は、1889年生まれだから、南原より56歳年長ということになる。ドイツのゲッチンゲン大学で法律、歴史、哲学を学び、ハイデルベルグ大学でも学んだ。カントの哲学に深い敬意を払った。

最初クールで、弁護士として働いた。1874年、ベルン大学教授として招聘され、憲法、行政法を講義した。1890年、連邦国民議会下院議員に選出され、死ぬまで代議士を務めた。1892年以降にはベルン大学教授との兼職で、スイス陸軍首席法務官を務めた。1899年、ハーグの国際仲裁裁判所判事。1902年には、ベルン大学総長に選ばれている。スイスの歴史研究者。ヨーロッパ全土の旅行家。1886年から1909年まで、スイス連邦政治年鑑を編集した。カルヴィン派の流れをくむ福音的な純粋なキリスト者。

25歳で、ヨハンナ・ゲルトナーと結婚。彼女は、1897年、死去。夫人は、最も優れた秘書であった。

○主要著作

1891年、幸福論Ⅰ

1895年、幸福論Ⅱ

1899年、幸福論Ⅲ

1901年、眠られぬ夜のためにⅠ

1919年、眠られぬ夜のためにⅡ

これらは、岩波文庫に収められている。1958年から1959年にかけて、白水社から、『ヒルティ著作集』全11巻が発行されている。

これらの著作には、根底に確固たるキリスト教の信仰が生きて流れている。これらの著書に引用されている新約聖書、旧約聖書の箇所は、ヒルティがいかに深く聖書を勉強したかを表している。ヒルティは、人生いかに生きるべきかを実に深く、徹底した信仰に立って思索し、そこから極めて実際的な処世の指針を与える。

2 ヒルティのキリスト教信仰

三谷隆正は、ヒルティを「カルヴィン派の流れをくむ福音的な純粋なキリスト者」と説明しているが、ヒルティ伝の著者（アルフレート・シュトイキ）によれば、ヒルティのキリスト教観について、次のように説明している。

・ヒルティの信仰要綱は、決して統一的なものではなかった。彼はキリスト教信仰を大部分自分自身の絶えざる聖書研究や日々の体験から得ている。

・キリストの本質に関する抽象的な思弁を、ヒルティは無益なものとなしなした・

・キリストは、プロテスタントだとか、カトリックだとかということをほとんど気にされないだろう。キリストは、生きる人間のほんの一部の人だけをキリストの僕とみなすような牧師や宗派とは違う。

・信仰に入るためには、意志や決断が重要である。

・ヒルティは、キリストの復活を重要視した。彼は、キリストの復活がきわめて自明な歴史的事実であり、キリスト信仰の核心であり、われわれが信仰を続けていくうえで、最も確か

な証拠である。

- ・聖書とともにある生活は、この世で最も平易で最も確実な生活である。
- ・信仰の源を福音書、中でもキリストの言葉に求めた。
- ・（ヒルティの伝記作者は、ヒルティは、パウロを重んじなかったと書いているが、ヒルティは、しばしばパウロ書簡の言葉を引用しており、筆者はそうは思わない。）
- ・礼拝とは、単に1週に一度説教を聞くことではなく、常に神の面前で生活しているのだという心の態度にある。
- ・いま教会が必要とするのは、神の愛に輝く人々、福音書の「地の塩」たる人がたくさんあることである。

以上のようなヒルティのキリスト教観を短く言えば、実践的、行動的な、福音主義のキリスト教と言ってよいであろう。（なお、ヒルティ著作集第9巻には、「キリストの福音」が収められている。）

3 南原繁のキリスト教観

南原繁は、矢内原忠雄のようにキリスト教の伝道はしなかった。このため、キリスト教について記した文章は少ない。その中で、1960年3月21日から26日にかけて、NHKのラジオ放送で話した「宗教は不必要か」という講演によって、南原のキリスト教観と考えられるものを、私なりに要約してみたいと思う。

- ・自己の内面の罪を自覚し、その贖いと赦しを求め、神の聖旨と神の国の正義が成就することを願った。内村鑑三から学んだイエスの十字架による贖いと復活を信ずる信仰と言えるであろう。
- ・私を支え、導いてきた力は信仰である。これは否定することのできない確実な経験であり、私の実験である。おおよそ信仰を証明するものは、そうした宗教的体験である。
- ・人間自身の知恵をもってしてはいかんともし得ることのできない大きな罪の問題があり、神との対決をよぎなくされる。
- ・合理的思惟を超えた宗教的非合理性の世界であり、そこでは各人の魂の信頼の実験が唯一のよりどころ。
- ・宗教的信仰は、科学的実験の世界とは次元を異にし、どんなに科学や学問の知識が進歩しても、少しもゆるぐことのない世界の消息である。
- ・宗教は、一人個人的な心情や魂の内奥にのみ止まるというのではなく、客観的には、教育・文化や政治・社会の上に、極めて重要な関連をもちうるものである。
- ・信仰とは、知識や認識でなく、意志の問題である。
- ・何を信ずべきか。善と正義を信ずることが根本である。
- ・人間を超えた絶対者に帰依信頼することによって、永遠の生命に対する望みと喜びとを受けることが、信仰の核心である。
- ・信仰は、各人の魂の実験として、生きた事実、力である。
- ・宗派を問わず、真実の宗教であるならば、全ての信徒は、平和を守る責任を持っている。

また、筆者はこのたび、「国家と宗教」の補論「カトリシズムとプロテスタンティズム」を読み直し、南原の信じるキリスト教は、次のようなものだと思った。

- ・内村村鑑三から学んだ無教会キリスト教（イエスの十字架による贖罪と復活の信仰）
- ・個人の自由、信仰を重視。
- ・民族共同体を大切にする。そこから日本的キリスト教を大切にする。武士道。
- ・信仰の表れとして愛の実行を大切にする。
- ・他の宗教、キリスト教各宗派と共同する。寛容主義。
- ・一言でいえば、価値並行論的キリスト教と呼んでもよいであろう。

南原繁のキリスト教を以上のように考えて見ると、ヒルティの信仰と、内村鑑三の信仰、南原繁の信仰の類似性が知られるのであり、南原が、ヒルティを勧める理由もわかるような気がする。

4 南原繁はヒルティを誰から学んだか

南原繁は、ヒルティより 56 歳年下であるが、一高時代、岩元禎教授のドイツ語の教科書として、ヒルティの「幸福論」を学んだことがある。ヒルティを、日本に最初に紹介した人は、明治 26 年から大正 3 年まで、帝大で哲学・哲学史を教えたフォン・ケーベル博士であったという。岩元禎は、ケーベルよりヒルティの著作を学んだ。

三谷隆正も、岩元禎教授より、ヒルティを学んだ。三谷隆正は、ヒルティを愛読し、次々とヒルティの論文を訳出した。南原繁編集の『三谷隆正全集』第 5 巻には、ヒルティに関して、次の作品が収められているから、南原は、三谷隆正からヒルティについて、色々聞かされて興味を持つようになったという想像もできる。

- ・カール・ヒルティ（「聖書講義」昭和 15 年 12 月号）
- ・ヒルティの読書論（「聖書講義」昭和 16. 1-3 月）
- ・ヒルティの雄弁論（「聖書講義」昭和 16 年 6-8 月）
- ・ヒルティの友情論（「聖書講義」昭和 16 年）
- ・「眠られぬ夜のために」（「福音の使者」大正 9 年 10 月）
- ・ヒルティの生涯（「教育の仕方」所収 昭和 17 年 9 月）

なお、岩波文庫の「幸福論」第 1 巻は、昭和 10 年 5 月に発行されている。

5 『眠られぬ夜のために』から

最初に、「眠られぬ夜のために」第 2 部から引用したい。「眠られぬ夜のために」第 2 部は、ヒルティが 1909 年に死去し、その 10 年後 1919 年に、ヒルティが生前ほぼ完成していた原稿に、長女のマリー・メンタ・ヒルティが若干の草稿を加え編集の上発行された。ヒルティの最晩年の作品ということになるが、この本は特に霊性が高いように思える。

(1) 『眠られぬ夜のために』第 2 部、草間平作、大和邦太郎訳、岩波文庫

・ 3 月 30 日

キリスト教の合理的な部分、すなわち、理知的な普通人のだけれどもがただ知性だけで理解しうる部分は、善き意思を備えたすべての人に親しみやすいものである。なぜなら、この宗

教は、すくなくともこれまで知られているどの宗教よりもすぐれており、また人間的な事柄により親切なことが、たやすくわかるからである。

これに反して、その神秘的な部分、すなわち神と個人との内的な直接的な関係になると、これは説明できないもので、ただ自己の経験によって把握するよりほかはない。

・4月20日

「神は、神を愛する者たちとともに働いて、万事を益となるようにして下さる」(ローマ人への手紙8の28)。これこそ、正当な、しかも長持ちする楽観主義である。このようなことを、我々は生涯において、それが単なる「偶然」とのみは思われぬほど、たびたび経験するものである。」

・6月1日

「あなたが教えることを実行するようにつとめなさい。若い時代には学ぶこと、教えることがむしろその本領であるが、とくに年齢が進めば、実行ということがはっきり外に現われて来なければならない。やがてそれぞれの人が何らかの善き、真実な思想の生きた表現となっていなければならない。そうでなければ、その人は無意味に生きてきたことになる。」

・7月2日

「すべての時代、すべての民族の文献全体の中で、この上なく精神豊かで、倫理的に価値の高いものは、あの数千年にわたる文書の集成であり、「聖書」という名できわめてよく知られているように見える書物である。」

・7月4日

「この世で最良のものはなんであるかを、あなたは知りたいのか。それは、神のそば近くにあること、精神と肉体の健康、良き結婚、良き国民性と教会、生計を充たすにたる良き職業、良き友人、立派な教養、生涯の主要部分が良き時代に出会うこと、出来ればその上に、聖霊の賜物の一つを授けられることなどがそれである。」

・7月8日

「苦難の時期こそが人を内的に進歩させる最大のはたらきをするので、それが幸福なのだ」という結論に達する。使徒パウロの晩年の数通の手紙は、このような意味でついには幸・不幸を完全にのり越えた一人の人間の姿を示しており、また「神を愛する者たちには、万事が益となるに違いない」(ローマ人への手紙8の28)という彼の実に有名な言葉が、彼自身において完き真理となっている。我々もまた、そのようになることができるのである。」

・8月29日

「人生の幸福な時期というのは、要するに、仕事に没頭しているときである。……最後の息を引き取るまで活動的であることが、現生の生活の意義であり、モットーである。」

・9月28日

「神を愛することが、あらゆることのなかで最も善いことであり、また、この神への強い愛は、パウロがその弟子のテモテに言ったように、実際、万事に益となり、「今のいのちと後の世のいのちとの約束」を持つものだ、と信じるようになる。あなたがこのことを一度確かに悟ったならば、それを堅く守ってゆくがよい。」

・10月29日

「若い人たちに善への勇気を教え込む事が出来れば、それは現代のあらゆる教育のとりわけよい仕事となるであろう。およそこの要点を欠く教育は、大した意義のないものである。」

・11月8日

「あなたは人生の最後の段階において、もはやおびただしい神学書やその他の宗教書を読む必要はない。我々の信仰の原点である4福音書と、そのもっともよい注釈書である使徒たちの手紙を頼みとするがよい。他の注釈書は一切必要でない。旧約聖書と使徒行伝は、我々の宗教の歴史的部分として欠くことができない。ことに預言者諸書や詩篇は我々を非常に励まし慰めてくれる。」

・11月14日

「最もよい時期として思い出に残るのは、しばしば、それに直面しているときには最も苦しく思われた時期である。というのは、その時期に、われわれは成長を遂げたか、あるいは、その苦しみがなければいつまでも残ったであろう自分の欠点を脱ぎ捨てたからである。」

・11月25日

「キリスト教は、おどろくほど積極的な^{エレメント}元素である。われわれはこれを、ただの教えとして、永く、じっと抱いていることはできない。かならずこれを実際にはたらかせ、またこの霊によって「歩か」ざるを得ない。…そして、もっとも手近な務めを果たすがよい。」

・11月30日

「ある人の生涯における最大の日は、その人の歴史的使命、すなわち、神がこの世で彼を用いようとするその目的が明らかにわかり、また、これまでに彼が導かれてきたすべての道がそこに通じているのを悟った日のことである。」

・12月29日

「あなたが心に追い求めている最も美しい死とは、確かに老年には往々現われるような魂と肉体の安らぎの中から、肉体的生命だけが穏やかに尽きること、であろう。そういう時、心臓の鼓動が、ほとんど誰にも気づかれないで止まれば、それでよいのであろう。ただ、この地上の生命を人間の持つ唯一のものだと考える、わからずやの医師が、人為的に刺激を与えて心臓の鼓動を引き延ばそうなどとしてはなるまい。…

だが、死については、もうこれ以上考えないがよろしい。考えても、なんら有益な結果は生じない。むしろ、生に執着することなく、しかも人生の任務のために、神のみ心にかなう限り、生き続けなさい。これこそ、少しも老人臭さを帯びることもない、最も良い年のとり方である。その後は、新しい青春を待ち望むことにしよう。」

以上は、筆者が、『眠られぬ夜のために』第2部から感銘を受けた多くの箇所から選んで記した文章である。キリスト教徒でない人も、感銘を受けた文章を書き抜いてみて頂くと、おそらく結構共通的で、この世を生きる上で勇気を与えられる文章が選ばれて、似たような抜き書き集ができるのではないかという気がする。

(2)「眠られぬ夜のために」第1部から

「眠られぬ夜のために」第1部から抜き書きした文章は、下記の通りであり、第2部からの引用が霊的な文章が多かったのに対し、第1部からの引用は、処世術的な文章が多くなった。

・1月14日

「うしろを見ないで、つねに前方を見なさい。最後には、この世の命を超えてかなたを見なさい。」

・2月26日

「人間のあらゆる性質の中で、最良のものは誠実である。」

・3月7日

「力の許す限り、中絶せずに有益な仕事をする事は、絶えず神の近くにあることと並んで、およそ人生が与える一切のうちで最も善い、最も心を満たしてくれるものである。」

・4月28日

「実践的に言えば、人生の主要事は、つねに自分の義務を行い、これに反する心の傾向や異論をあまり気にすまいと、断固たる決意を抱くことである。」

・6月15日

「勇気を失わず、勇敢な人でありなさい。そうすれば、慰めは必要な時にあなたに与えられよう。勇気は、あらゆる純人間的な性質の中で最も有用なものである。」

・7月13日

「どんなに大きな仕事であっても、それを細かに分けて、何時も手近なものだけを眼中に置かならば、それは小さな仕事をするのと同じになる。」

・8月12日

「勇気と謙遜とは、つねに併せ持たねばならない。」

・8月29日

「力強い善人にならなくてはならない。すなわち、神の前には謙遜に、人間に対しては確固たる態度を保ち、また、たいがい無遠慮極まる世間に対してはあまりに柔軟にすぎないことである。」

・9月8日

「キリストの神性について議論するのは全く無益なことである。キリストの生涯の秘密は極められないし、又究むべきではない。三位一体ということは、それ自体理解の及ばないものであり、もし、こう言いたければ、極め得ないものだと言ってもよい。」

・9月18日

「最も力強い人生哲学は、勇気と神のみ心への献身との正しい混合から成り立つ。そのどちらか一方がちゃんと立派に現われない場合、事はうまくはこばない。」

・9月25日

「およそキリスト教は非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、この世の唯一の実行できる、また実際に最も効果ある理想主義である。」

・11月28日

「仕事をするときは、いつでも、まず第1に、最も必要なことをしなさい。元気よく、そし

てその仕事の主要点から着手しなさい。」

6 「幸福論」について

ヒルティの「幸福論」は、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと3巻あるが、Ⅰは1891年ヒルティ58歳の時出版された。ある師範学校の校誌の求めに応じて執筆したものであるというから、高校生、大学生を念頭において執筆されたと考えてよいであろう。第1巻は非常な好評を得たので、第2巻が1895年ヒルティ62歳の時、第3巻が1899年ヒルティ66歳の時、出版された。

3巻の「幸福論」には、それぞれ8編の論文が収められている。今これを、見出しから、「処世術的項目」と「哲学的・キリスト教的項目」に分けて記してみると次のようになる。

幸福論Ⅰ（1891年）（ヒルティ58歳）

① 処世術的項目

- ・ 仕事をするコツ
- ・ 策略を使わない処世の道
- ・ 良い習慣
- ・ 時間を作る方法

② 哲学的・キリスト教的項目

- ・ エピクテトス（ギリシアのストア派哲学者）
- ・ この世の子らは光の子よりも利口
- ・ 幸福
- ・ 人間とは何だろう

幸福論Ⅱ（1895年）（ヒルティ62歳）

① 処世術的項目

- ・ 人間知
- ・ 教養とはなにか
- ・ 人生の階段

② 哲学的・キリスト教的項目

- ・ 罪と憂い
- ・ 我が民を慰めよ
- ・ 高貴なる魂
- ・ 超越的希望
- ・ キリスト教序説

幸福論Ⅲ（1899年）（ヒルティ66歳）

① 処世術的項目

- ・ 苦難を通しての勇気
- ・ 我ら何をなすべきか
- ・ 孫たちに幸いあれ

② 哲学的・キリスト教的項目

- ・二つの幸福
- ・信仰とは何か
- ・わが汝になさんとするは、驚くべきことなり
- ・現代の聖徒
- ・高きを目指して

「処世術的項目」の中から、「幸福論」Ⅰに収められている「仕事をするコツ」の内容を要約して紹介する。

「仕事をするコツ」

- ・絶えざる有益な活動の状態がこそ、地上における最も幸福な状態である。仕事との創造と成功の歓喜が幸福にする。最大の不幸は仕事のない生活。
 - ・習慣的な勤勉が容易になるコツ。
- ① 着手しうること。最初の一字を書く。
 - ② 特別なインスピレーションは、仕事の間起こってくる。
 - ③ 毎日一定時間を仕事にささげる。
 - ④ 序文や表題は一番最後に作れ。
 - ⑤ とにかく始めることだ。
 - ⑥ 明日のことを思い煩うな。
 - ⑦ ある程度の疲労が生じたら直ちに中止すること。仕事を取り換えることは、元気を回復させる。
 - ⑧ 無益なことに時間を費やさぬこと。新聞を読みすぎること、いろんな会への参加。
 - ⑨ 精神的な仕事は、何べんも手を加え仕上げること。

「哲学的・キリスト教的項目」の中から、「幸福論」Ⅲに収められている「信仰とは何か」の要旨を紹介する。

- ・第1の問題は、信じようとする意志である。それによって信仰は始まる。実験するがよい。ともかく、そうであるとして実行してみるがよい。
 - ・人間は、しばしば長い間又苦痛を伴って、信仰こそ正しいこと、信仰は不信仰よりも幸いであることを経験しなければならない。
 - ・人生の経験によってそこまで導かれた人は、歴史の中から、次のような事実を見出すことがより容易になる。すなわち、人類に永続的な影響を及ぼした偉大な英雄は、たいていが、自分の眼では見なかった何ものかを堅く信ずることの出来た人であること。
 - ・信仰は、いつも一つの力であった。
 - ・何を信じたらよいか。まず、善を信じなければならない。
 - ・キリスト教の信仰の核心は、キリストの復活である。
 - ・キリスト教の信仰の要約
- ① まず神の国と義とを求めなさい。
 - ② すべて重荷を負うて苦労している者は、私のもとに来なさい。

- ③ キリスト教は、実験されることを厭わない。まず実験してから、その後で始めて判断することができる。
- ④ 私のもとに来るものを、私は決して拒まない。その人はもはや真理に飢え渴かない。これは、すべての人にとって人生の幸福に至りうる道である。

ヒルティの「幸福論」の各項目は、処世術的な項目でも、一篇が 30-50 頁もあるから、今日わが国で出版されている新書版のハウツウ物の本のように読みやすくはないから、一篇ごとに、気合いを入れて読む必要がある。

「処世術的な項目」と「哲学的・キリスト教的項目」は、見出しだけで筆者が分類したが、内容はキリスト教的世界観に立って書かれているから、それほど大きな違いがあるわけではないと思うし、私の分け方が正しくないこともあると思う。

全体がキリスト教的世界観に立って書かれているから、クリスチャンでない方は、処世術的項目を先に読んでみるのもよいかもしいない。そして、幸福のためには、仏教であれ、神道であれ、我々の命はこの世だけで終わりではない、死後の生命があるという宗教的世界観に思い至られると幸いだと思う。

今本屋に並んでいる岩波文庫の「幸福論」Iの奥付には、次のようにあった。

1935年5月15日 第1刷発行

1961年10月18日 第33刷改版発行

2018年11月26日 第103刷発行

「幸福論」を論ずる最も基本的著作として、実に永く広く読まれている古典的名著であることが分かる。

終わりに

幸福論第3巻「高きを目指して」の中に次のような文章がある。

「命のある限りはつらつとした精神を持って働き続け、最後に完成された神の器として、仕事のさ中に倒れること」これこそきちんとした老年の正しい経過であり、また一般に人生のこの上なく望ましい終局である」という文章があるが、南原先生の最期はその通りであった。

1974年5月19日、朝、南原は自宅で最期の病床にあったが、東畑精一に電話し、学士院の建物の落成式は5月30日に行なうが、その時寄付を頂いた財界の人によるしく、という電話を一方的にかけ、東畑が返事をする前に切れた。その後南原は出血し、その日の午後3時頃、南原は昇天した。まさに「仕事のさ中に倒れる」最期であった。

自分はキリスト教徒であるので、納得しながら読むページが多かった。これまで過ごしてきた過去を振り返って、学生時代入門の頃、信仰がよく分からないまま、洗礼を受けたのはよかったとか、中年の時出会った苦難が、信仰を続けるうえで役に立ったとこととか、いろいろなことを思いだしながら読んだ。

南原先生が勧められたように、ヒルティは、老人に向けた非常に興味深い書物であった。この発表のおかげで、良い勉強ができて感謝する。